



年間第 24 主日 (ルカ 15:1-32)

私たちは神に探し出されて連れ戻される小さな存在

「放蕩息子」のたとえが聖書と典礼に印刷されていませんので、今年も聖書と典礼に掲載されている、「見失った羊」のたとえと「無くした銀貨」のたとえに絞って考えてみたいと思います。

最近では皆さんの多くが、「携帯電話」「スマホ」を持っていると思います。携帯の置き場所を忘れて困ったことも一度や二度ではないでしょう。いよいよ置き場所を思い出せずに困ったら、皆さんはどうやって携帯の置き場所を探しますか？小学生中学生のお父さんお母さんはスマホの置き場所がわからなくなった時、どうやって探していますか？

おそらく、同じことをして探し当てていると思います。それは、「携帯電話に電話をかける」という方法です。ズバリでしょうか？幸いなことに、携帯電話に固定電話などから電話をかけると、着信音が鳴ったり振動したりして、自分の居場所を教えてくれるのです。

さて、福音朗読でたとえに出てくる「羊」や「銀貨」はどうでしょうか？残念ながら、これらは自分から「私はここにいますよ」と知らせしてくれません。100%、持ち主が探し当てない限り、戻ってくる可能性はないのです。携帯ならどこに置いたか思い出せないとき、音を鳴らすことができます。それとは比べ物にならない忍耐力をもって探さなければ、「羊」「銀貨」は見つけ出すことができないのです。

だから、喜びも特別なのです。お話の中では、「友達や近所の人々を呼び集めて」(15・6)「見失った羊」「無くした銀貨」のことを喜ぶのです。大げさに聞こえるかもしれませんが、見つけ出すまでの努力や忍耐が大きい分だけ、喜びも大きいのです。

ここまでの話をした上で、イエスはこう言います。「このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」(15・10) きっと道を外れた人というのは、自分から「私はここにいます。私を助けてください」と言えなくなっているのでしょうか。だからイエスが、道を外れるたびに苦労して探し回って神の国の交わりに連れ戻します。その苦労が大きければ大きいだけ、喜びも大きくなるのです。

今回朗読していませんが、「放蕩息子」のたとえに登場する弟も、遠い国で持ち物をすっかり使い果たして困り果てても、「お父さん私はここにおります」と声を出すことができませんでした。心を入れ替えて父の家に帰る時も、まだ遠くにいるうちから父親のほうが見つけて走り寄ったのです。ここでは見つけ出すまでの「忍耐」が大きかったので、喜びもひとしおだったのです。

私たちはどうでしょうか。私たちは「放蕩息子」でもないし、特に「罪人」というわけでもないのに「ここにおります」と言って悔い改める必要のない九十九匹の中にいるのでしょうか。私はそうは思いません。私たちもまた、「道を逸れて」声を出せないでいる一人なのです。

その証拠に、イエスはすべての人の罪のゆるしのために十字架にか

かりました。今月の日本の司教団の取り組みと重ねるなら、「すべてのいのちを守るために」イエスはいのちを差し出したのです。ですから私たちは、道を逸れるたびに神に向き直ることで、神の天使たちの間に喜びがあるのです。

ミサの中で「全能の神と、兄弟の皆さんに告白します。わたしは思い、ことば、行い、怠りによって、たびたび罪を犯しました」と唱えます。単なる儀礼として唱えている人もいるかもしれませんが、罪を犯して道を逸れていると謙虚に認めるなら、神が助けに来てくださるのです。

また、定期的にゆるしの秘跡を受ける人もいるでしょう。自力で神のもとに戻るができるのなら、秘跡のお世話になる必要などないはずです。ミサの中での告白も、ゆるしの秘跡の告白も、常に私たちを探し出そうとしておられる神の前に身を置くことなのです。

神は、途方もない努力と忍耐で、私たちを探し出し、ご自分の交わりの中に連れ戻してくださいます。その深い愛に感謝しましょう。神の深い愛を知ったのですから、私たちも周りの人に深い愛、忍耐を持つようにしましょう。今週一週間、「見失った羊」「無くした銀貨」の学びを告げ知らせる者となりましょう。

年間第 25 主日(ルカ 16:1-13)